ANL Secondary Publication

妊婦の鼻腔に発生した毛細血管拡張性肉芽腫に対する抗生剤を併用したステロイド内服の術前治療について

Pre-operative effects of the administration of systemic corticosteroids combined with antibiotics on a lobular capillary hemangioma in the nasal cavity

花澤 豊行, 米倉 修二, 中村 寛子, 藤川 陽, 岡本 美孝

Toyoyuki Hanazawa, Shuji Yonekura, Hiroko Nakamura, Akira Fujikawa, Yoshitaka Okamoto

Department of Otolaryngology/Head & Neck Surgery, Graduate School of Medicine, Chiba University

Auris Nasus Larynx 2016 ; 43 (2) : 203-206.

はじめに：毛細血管拡張性肉芽腫（別名：化膿性肉芽腫症）は、口腔および鼻腔に発生し、易出血性の腫瘍である。また、妊娠中に発生することも多く、治療の主体は手術による摘出となるため、そのタイミングは重症度と妊娠のステージに依存する。

今回、われわれは妊娠中に発生した鼻腔の毛細血管拡張性肉芽腫を経験し、術前治療が奏功し、内視鏡下に摘出することができたので報告する。

症例：症例は、30歳女性、妊娠4カ月から右鼻閉と鼻出血が出現し始め、出産後2カ月を経過しても症状が増強するために、他院耳鼻咽喉科より毛細血管拡張性肉芽腫として当科に紹介された。右鼻腔を充満する淡赤色の分葉性腫瘍を認め、MRIでは右鼻腔前方を占拠する血行に富んだ腫瘍を確認した。切除には栄養血管の塞栓術や外切開でのアプローチが必要と判断したが、術前に抗生剤レボフロキサシン（500mg/日）とプレドニゾロン（30mg/日）の内服を開始したところ、投与後1週間で腫瘍の劇的な縮小を認めた。抗生剤は1週間で終了し、プレドニゾロンは2カ月間の漸減療法を継続した結果、腫瘍のさらなる縮小を認めた（図1）。縮小傾向が乏しくなったため、内視鏡下での摘出術を行った。塞栓術の必要もなく、右下鼻甲介先端を茎とした腫瘍を少量の出血で摘出できた。病理所見では、腫瘍は2つの組織像から構成されており、血管増生を主体とする領域と肉芽性変化に富んだ領域が存在した（原文参照）。

考察・結語：妊娠中に発生した毛細血管拡張性肉芽腫を術前治療により縮小させ、内視鏡下にわずかな出血で摘出することができた。術前治療としての抗生剤投与とステロイドの内服が奏効した理由として、抗生剤は成因の一つとなった化膿性炎症を制御し、ステロイドは腫瘍に存在した肉芽性病変を制御したものと推測した。

図1 右鼻腔腫瘍の投薬前後のMRI所見（横断および矢状断）

AおよびB：右鼻腔前方を占拠する腫瘍が存在する。CおよびD：投薬後2カ月、腫瘍は著明に縮小している。